

ある日、兎は、お年寄りに今日こそはおいしいものを用意します。猿と狐には、木をくべて火を用意しておいて…と森に入っていきました。

でも、やはり、何も持たずに帰ってきたのです。猿と狐は、君がいうとおりに準備していたのに、とぼやくと、兎は…、私には食べ物を持ってくる力がありません、どうぞ、私を食べてください、というと同時に火に飛び込んだのです。

その時、老人は仏法の守り神である帝釈天に姿を変え、兎を抱きかかえ、この尊い姿を、すべての生き物に見てもらおうと、兎を月にお移しになられたのです。

涙が止まらなかつた

御座宿まで、足下を照らしてくれた月を振り返って仰ぎ見るとき、子どもの頃に聞いたこの「月と兎」の話が思い出されます。



阿弥陀さまの慈悲は柔らかな月の光となって
わたしたちを照らしてくださっている

暖かい御座宿で「正信偈」唱和の後に拝読する「御消息」(230年ほど前、乗如上人が在所寄り合宛に出されたお手紙)には、「経(観無量寿経)には、光明遍照十方世界、念仏衆生、摄取不捨とはのたまえりと知るべし」と記されています。

阿弥陀さまの慈悲・願い・働きが、私たちの闇を照らす光明となつて、一人一人に届き、念仏の人をもらさず救ってくださいいますという「光明遍照十方世界」の経文を、昔、蓮如上人は法然上人の「月影の至ら

ぬ里はなけれども、眺むる人の心にぞ住む」の和歌を引用しながらお説法なされました。

仏の大悲を身近な月光にたとえてのお話を聞いて、お

子さまの実如上人は、涙が止まらなかつたと「蓮如上人御一代記聞書」に述懐しておいでます。

「月も見て」の句

先に歩まれた人々は、光明となつて私たちの闇を照らし続けている弥陀の本願を、月光に見味わつてこられたのです。

回御遠忌を迎える頃には「ともかくも風にまかせて枯れ尾花」(安心)とうなずかれ、74歳の辞世句に、「月も見てわれはこの世をかしくかな」とお詠みになりました。

柔らかな月の光に、どれだけの慈しみを味わわせていただいたことか、それが「月も見て」であり、その勿体なさに、手が合わさる思いを、「あなかし」と同じ「かしくかな」の一言に籠めておられます。

生老病の苦の世を歩んでい

る私たちですが、御座の場では、笑顔があふれます。春が近い喜び、また同じ場で会えた喜び、その奥の深い所からの笑顔は、千代女が至った「あるがまま」(安心)から、自然に生まれてくるのだ、といただいでおり

ります。

弥陀に励まされ、自然の中に生きた先人の願い・歩みは、至る所で私たちをも励ましています。それらの願いの一端を受け止め、踏みしめながら、一日ひと日を歩んで参りたいものです。